

碗久松山物語

四



~13
3916
4



門 13
3916
卷 4



碗久 柳巷 話説 卷之四

東都

曲亭

主人

編次

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

貪婪婆子と殺して金を玉塊に比す

碗久ハ長堀の危きを脱してや益婆が家に走り着させ松山に
向に女の童答て彼君ハ甲夜より山を待てびくおせしが根引
ぬの賊主の来ぬと聞えしハハひるしずも出口まで行ぬぬ飯
ぬのふれもわらじ。まハくお坐せとて客房に隣り子舎に伴
ひく銚子盃小肴とれた経よりそをてとて来つ燈を外へ洩らさ
とて屏風立撓らして出ぬたりの年ハまじ三五ふも満ちぬと
廓に生育バもづら間夫さふく潜するも段ぬのをがまひ

松山巻之四

たりうて碗久ハ燈火ふさし對ひ来しうて行すを思ひあふ
 春の夜も短くて二更の大鼓安ゆきさる程小松山ハまう人ハ
 来ずもさるく思ひぬ人を伴ひく客房に飯をまう蒸婆ハ黠
 の女の童とともふ彼賊主の給侍して盃と拳酌を取つてさうにも
 わらで高く笑ひ愛さうらぬもさうさうと信くしげ小管待が客
 人退し蒸婆とさえ久り又松山小對ひて門出もいづ翌の夕
 ぐと定めしむバ頃日暮し歌妓或ハ女童等ハ像見をさし
 ちやとさひさめて来し花街の名残も今宵一夜さる小物ぢり
 ありさうとびや天地乾坤渾沌未分ハいささ進雄号ハの

瓶子ハ味酒を醸して山田の大蛇を殺しぬひしより美酒ハ多
 くと下三盃飲し觴も君と酌てと酔もすは節曲もさる
 疲倦し幼様牙鼓戯ハちけり君が爪音をさすうこれ
 ます着ハわらしきしとゆさるも松山ハ目今飯の来し
 ち死女童が耳語て碗久と子舎小潛しおたぬと告る身ハさ
 ぬるがらゆハ其所ありてさるさる回答もせず蒸婆
 形勢とこんくわくとち笑ひさる時ハ涙の先立ハすべて
 女子の情より人の心を和らる糸竹もさるめさる中彼野の流
 け琴とさくめて来すやと焦燥ハ女の童さうさうして柱めて居
 玉琴もさるの寵とさるさる膝に流る涙川堰わて松山ハ

隔の襖も山鳥のむらゝの初尾の鏡よりと声と曇る春の月ゆる
び庭の末の松峯上の風の吹くこゝの憂とまじらるる昔よとて

すゑの松山浪とまじりてうららぬまの松が枝小君がちの春のうらり
きた汀の池小亀むとて

身にまじりて秋のころ月も隈きたわやの戸にうらるる昔よとて
うけゆるこころらゆ

どうも出せる調も致小去年のその夜とまじり出る唱歌のころと
しうバ碗久とまじりて千代と契つて吾妹子が池の汀小梅が

亀の浮くる窓むらむらとて有馬の温泉沸くる胸くるる思
ゆも

中々に今いふ思ひ終るとおろのそ入つてるらとらと

あつたの命を逢ぐらとてあつたのあつたのあつたのあつたの

あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつたの

小夜千鳥夜もすくららとてあつたのあつたのあつたのあつたの

声々に答ふる少女亦が散動く奥を催せば碗久耳を側てく

又くる夕のわりるゆと今入目を悼つる関の戸も開けらぬ

圍の屏風小掛しつゝ衣の苗音南のうらふなを死入のころを
あつらふがら

ちたりのきる送ふ袖とまきりつゝ末のまら山浪越とていひゆ

いひをせぬがふりうらまや

とうひ果まば盃も敷その土圭更團しう。さしづ睡らうまのら見

そし燕波くハ女の童に盃盤をさき運ばい。松山といそがー

客を臥房に誘引し。おのが婿へとくゆね。松山ハの席の果つを

遅しと思ふほど臥房へハ立ちまらさ小棲と寒く子舎の襖を

ひそかに引ぬくまば裡よりもそまどと曉つて掻遣る屏風小

掛び入る膝小携つてよく泣涙も水も漏さしと契つて誠ハ

ゆらゆらうらうら折しも隣坐の庭の木の間と焼出と椽先

近く潜まらぬのありうらそのと松山が客臥房とせくその人を

招きよー占のそゆ音もせどゆらまに子舎の襖の襖ハ

耳とさし著るの容子を竊聞とせまらさしと碗久ハ松山が

背とくの折頃日内ガがびづー殊更今宵の首尾あーと彼

田舎人がらあげゆま。こまハ負るる葎真と外ハ皮之腹とく

多酌の酒もあやゆくと酔で胸の痛りりしといと本意まびハ

聞ゆまば松山いしは泣きとて智恵も器量も身帯もまらあハ

雪とまりゆもこが身故るまどそひも遠す根引のるも定そ

翌ハ身價を遍子すとまば門出と死出の旅とらと覚期究てはま



傾城かぎ 傾國かぎ 答こたへ 客きやく 人ひと 小
 かき 客きやく 人ひと 小
 客きやく 人ひと 小
 客きやく 人ひと 小



客きやく 人ひと 小
 客きやく 人ひと 小
 客きやく 人ひと 小
 客きやく 人ひと 小

峯乃雲

ども有身ありみて五月ごごに八人の形貌かたちも成なりとひまのく八月はちがつふるむる。
 だましく病やませし君きみが胤いんをなするた母ははのゆめて日の光ひのひかりもさす。塞ふさ
 の河原かはらの童わらわ頭あたま討うち入いるころを。ちもへ命いのちもさすままで迷まよひたれぬ
 父ちちの雲うみとらる居ゐつ待まち待まちりつゝおぼえつらうくまむさふ。あはれを憐あはれ
 むひえん。びづりて死あぶらむ。碗わん久く声こゑを低ひくうしてその恨うらみハ理ことづ
 るら金かね調しらんよふかもろく。あめよあまる身みの真ま愛あいゑその顔かほ
 目めも猜なづのふあつるふ今いまの養母やしほハ原はらが乳母ちちあつてうつくふ。あ
 庇ひたと稟りんし人ひともまじ。その舊ふる恩おんを復かへえんとて今いま宵よ猛ま小こ一ひと畏おその金かね
 をち出いし。まよとめて松山まつやまが身價みぢやうをころし。せしうくそ思おもひも
 うげど重おもきゆひし。たにその金かねを懐なつかしめて長堀ながほりまで来きつる。た

悪棍あくこんの跟つらして既すでに金かねを奪うばひまじり。まをりし。小路こうじゆく人の情なさけ
 けく危難きなんと脱だつ走そうとくふ到いたり。あひの外ほかの時ときも後あとにぬき。
 む人ひととく頂たかふけし。賤布せんぷの内うちよりち出す。金かね小こ磨ありぬ。持もち女むすめも。あ
 荒あふらうち笑わらふ。外面うへめんをふ。あが。廓くわくが。ひする子こと。追おも出す。世よの中なか
 の親おやのまらひと。愛あはれに退ひく。小こ退ひまね。妹いのせ。山やまのまわ。まよ。
 弥高やたかき母ははの恩おんゆえ。けり。彼客かきやくハ盟ちがひと契ちがひつ。そのま。身價みぢやうを遍あ
 ち。ま。家いへ刀やいば自みづかに談合だんごうして。その金かねを遍あち。
 方かたハ木き仏ぶつも。うへ。ま。門かどの柳やなぎの糸いとも。ま。磨ありぬ。あ。た。
 小こ世よと。る。人ひとの習俗しやくじゆくも。数かずハ。の。ま。り。あ。り。た。ら。ね。ど。の。ま。
 見え。ゆ。り。ま。ら。い。ま。づ。あ。ら。く。家いへ刀やいば自みづか告つげる。ま。の。ひ。の。け。と。ま。

碗久^{おんきう}忙しく引^ひきぬ。こまきも又封^{ふう}じつるまきふのて来^{きた}りて。い
 まこ金の敷^{しき}とあきず。あび^あ待^{まち}り算^{さん}果^{くわ}くこと。いひもあきせ。
 累^{つみ}の封^{ふう}皮^ひ切^きとけが。黄金^{おうごん}少^{すく}ぬら^らずして。その容^{よう}あ^ある漆^{うるし}墨^{すみ}の飾^し
 にとそ步^ふ鐵^{てつ}具^ぐるり。い^いり^りゆ。ま^まり^りに送^{おく}ふ顔^{かほ}と。い^いあ^あい^いと。
 呆^{あは}れ^れの呆^{あは}れ^れとて忙^{いそ}げ^げら^らし。そのま^まに碗^{おん}久^{きう}ハ長^{なが}堀^{ほり}橋^{はし}の^のま^まの^のひ
 あ^あい^い膝^{ひざ}と腹^{はら}とあ^あき^きり^りる^るハ原^{もと}来^{より}甲^か夜^や小^こ長^{なが}堀^{ほり}中^{ちゆう}に。こ^こま^まを
 救^{すく}ひ^ひら^らる^る武^ぶ士^しも。あ^あら^らど虎^こ落^{らく}の敷^{しき}計^{けい}ゆ^ゆて。實^{じつ}物^{ぶつ}を摺^すり^りて
 も正^{ただ}しく舊^{ふる}の賊^{ぞく}布^ふゆ^ゆて締^ひび^び。紐^{ひも}と解^とく隙^{ひま}の^のあ^あら^らず。一^{ひと}尚^{なほ}
 母^{はは}の^のま^まゆ^ゆより。う^うく誑^{あざむ}か^かせ^せ今^{いま}宵^よの首^{くび}尾^びと齧^かか^かハ。肉^{にく}に^に踏^ふま^ま
 吾^{われ}小^こ面^{めん}目^めと矢^やせ^せる^るハ。是^{こゝ}より^{より}あ^あい^い離^{はな}ん^んく^くを^をく^くま^まの^の入^いら^らる^る彼^{かれ}中^{ちゆう}せ^せよ

是^{こゝ}ゆ^ゆも^もせ^せ親^{おや}と^とい^いの^の名^なふ^ふを^を放^{はな}う^う。一^{ひと}回^{まわ}の^のあ^あり^りの^の金^{かね}と^と展^{ひら}け^け見^みら^ら
 ち^ちの^のあ^あら^らど^ど誤^{あや}まり^り。い^いら^らる^るゆ^ゆも^も日^ひ来^{きた}信^{しん}と^とい^いら^らる^る人^{ひと}の^の俄^{いきなり}頃^{とき}ふ^ふの^の後^{あと}
 ら^ら死^しす^すハあ^あの^のハ^ハ既^{すで}に^に金^{かね}と^と失^しひ^ひて^て。い^いら^らる^る小^こ来^{きた}ま^まら^らう^うひ^ひも^もく^く立^た帰^{かへ}
 て^てい^いひ^ひと^とい^い言^{ことば}語^ごも^もあ^あら^らど^ど今^{いま}ハ^ハ是^{こゝ}を^をせ^せて^て美^み理^りふ^ふ迫^{せま}り^りて^て捨^する^る命^{いのち}も
 浮^うく^くる^るあ^あの^の百^{ひゃく}年^{ねん}の^の軀^{かみ}と^と七^{しち}。い^いら^らる^る後^{あと}の^のい^いら^らる^るハ口^{くち}を^をい^いら^らる^る
 ぞ^ぞと^とい^いる^る。過^{あや}世^よの^の悪^{あく}業^{ごう}も^もい^いら^らる^るハ。せ^せん^んず^ずべ^べら^らを^を身^みと^とす^する^る。昔^{むかし}の^の鎗^{やり}
 う^うら^らり^りる^る夜^よの^の道^{みち}と^とい^いら^らる^る商人^{あひな}の^の大^{おほ}威^いも^も短^た刀^{たな}と^と搔^かき^きり^りを^をあ^あく^く抜^ぬく
 且^{かつ}ハ松^{まつ}山^{やま}聯^{れん}の^のい^いら^らる^るに^に携^かつ^つ。肉^{にく}を^をひ^ひと^とり^り死^しん^んと^とい^いら^らる^る日^ひ来^{きた}誓^{ちか}言^{げん}。一^{ひと}言^{ことば}
 葉^はと^と鈍^{おろ}く^くも^も忘^{わす}れ^れる^るハあ^あや^やそ^そま^まの^のあ^あら^らり^りに^にい^いづ^づ。一^{ひと}そ^そひ^ひも^も果^なぬ
 縁^{えん}一^{ひと}ら^らハ真^{まこと}土^{つち}を^をか^からん^んハ伴^{とも}水^{みづ}の^の地^ぢ獄^{じやく}劔^{けん}の^の山^{やま}も^もと^とろ^ろと^とも^もい^いら^らる^る。

諭ことと倦ぬ別を生くる悲しむにいららぬ後世とて人の
 大事をまじく身と先ぬ殺してとく死口説つより出す母の像見の
 仁田山袖唐放さねば人もんぬ護身囊もいくとせと故郷子安の
 観世言ひら遠くらの臨月小安産せとせぬ人ぞと子故ぬ祈つて
 現在の願支も今ハ又来世とてのそなる果敢るまのハ生死多
 とまハ又ハ身が父上の納聘こそ書字ゆくとり短冊も讀
 くとく妹と夫の縁短きまのいととふもくつ木形の
 辞世の哥も経才とも思ふとまらふとせはらぬといふも涙ぬ
 くとまて護身囊とものろも小懸るなほのひ草の追出
 るまてに袂のまらふ露けくものまらふまらふ碗又臉とまらふ死

此身ハ一言の信を守つてこそまらぬ由多ふ千万の苦辛を言示こまらぬ又
 亡父の志を果さんとて家をつくるハ身と亡す加梅トハハ父が
 寛柱とてハ鮮く汚名と雪んと必ひてしとふ小至つて萬事休
 せりとも故郷と出しより田井八太郎が生れもたらす日蔭の花の
 岡もから七周ひぬとまき身の果とて竭ぬららぬハ姑婦が死當今
 も黄縁とくまら障礙とるせしはや物の道理もこたえ入し丈夫ぬ
 ハ似けるく多くもわらぬ金も急ぬ死んと思ひ定めつる迷ハハいぞ
 哀まらぬ松山も目と抑拭ひこる身も又いと稚くて母にこそまらぬ
 面影もあやむらがるハ此世もや在すらん死人のやまらぬハ
 々々面亡とてハ冥土ゆく環會はらぬも名告らぬハ他ハ過中せん

深き岩の掘江の水の渡る橋をきとらぞとて泣声あつ袖の上
 遠き寺の鐘音づいて僕をばや七ツり六の街の惑ふ身と救
 ひぬと念佛しそくくといそがせが碗久もいふくつていと思ひす
 氷より短刀を引抜て雪をづりき松山が胸のわらうと刺んや折
 去もぬと燕波まの松山が彼客とひとり睡らうとあつとひそ
 うふ起出彼是と索るふ子合ふと碗久と物くころのまのまはて
 大ふ焦燥あつらうふ燕襖を袖圓まつ入る来まが裡の慌忙
 て碗久いぬらうと又と鞋小短ふ違ふと抜くつとまふと立つて屏風
 の骨の回ふと入るくその後へ躲まううくて燕波まの案内も
 せどまうと入る夫庭ふ松山が改髪を引廻と鍋とち砕くやうなる

声とあり立汝ホりうまはうくまてふ膽の太き世の貪ふ神と
 のものよりとどその神体とあらうとふお人バ汝ハ家の食
 之神ゆとありうと容止も世の勝まをくく加茂川の水も飲
 多く浴より賣るを来ま何まも尋常にいあらうと思ひ候り
 鞍の金の換てふお病とつるふ病ありと客ふあらうと荒を
 とらざる猫ふいおまきととまと思ひうと一氣と長安ふと其
 せんやうとつるふおのが愛する人ぬ誠をと竭し世渡つと外ぬす
 が憎けまどこの人の錢あるとわいひまわし事も恐ひぬ既ふ錢
 竭てい仏とつとつてつるうるべまふあらう況や預るう稀る財主
 のて身と償ひ故郷へ俱してとらんと宣はする、とらるは傍伴

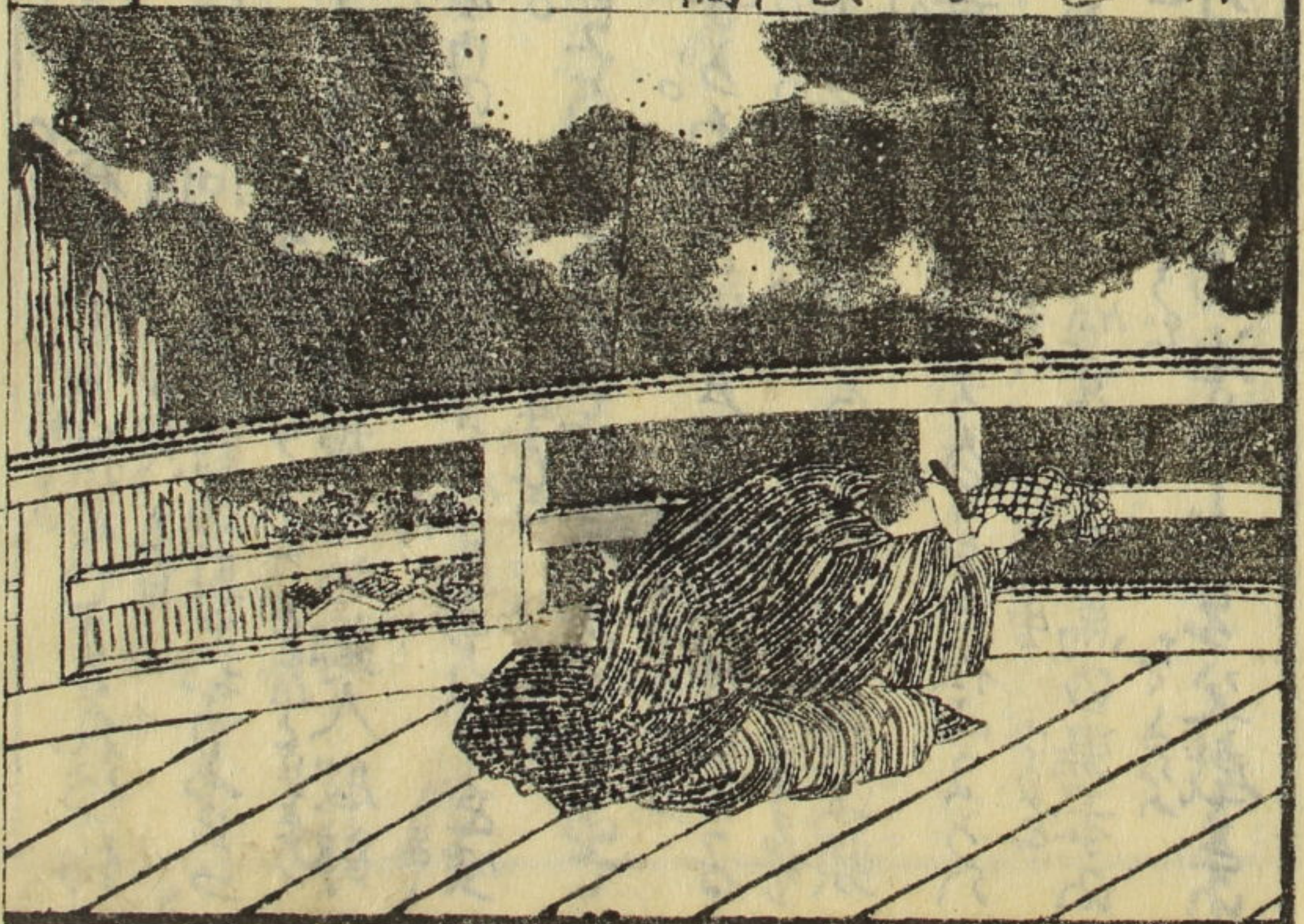
ろら子や速すみの心こころをわらへてゆくその人ふ身をまろし生涯せいがいのの計はかりを
 みてこそし損そんと云ふまじい事なりやいなふては花あなを
 強面つたかのくさるゝ銭ぜにを死人せんとの定まことを速すみくこまゆ損そんのうへる損そんを
 正ただなる夏なつ思おもひのりやいな虚うつけ氣きとやいな實まことふくが家の負ひたがう父ちち神かみの
 わらわうと何なにぞやうけてもさる銭ぜにを死人せんとと思おもひ終しまぐと死しりてく
 回答こたへよとてしきまはれく罵ののち辱ぢる呵あ責せの拳こぶしふあろくより苦くるしをも外まへに
 使つかまん面おもて目めるまふ松山まつかみやま涙なみだを堰せきりねくくが怪あやま世よとてくろくろ家いえ
 刀やいば自みづかの腹はらくまーく身みゆくのうら死し目めふあふ覚さつ悟ごのうへんれ
 ぞ碗わん久ひさねくはまのふく逢あひ逢あひをゆる契ちぎりああらび推おしきより結むす号ごうし
 夫おとこへくろく節ふし操さくぎふくひひとくよままく人ひとふ折やぶらるゝ牆かべの花はな身み

のるる是こゝろをいふとせつとすぬいへひてまをいふ甘あまもめふ眼めを睨にら
 脱はな跡あとりくる齒はを切きてさ安やすてのひら放はなつがく美うつくさ顔かほるまを鼓つづ
 の皮かわより厚あつくする碗わん久ひさふあさんでいひ記しるるこの結むす号ごう夫おとこの逆さか
 容かほふあふひらひらとて技わざ女の親おや方の世よとてまらんあふ人ひとに憎にくし腹はら
 だくといひおまきあらく罵ののち辱ぢつて把とする刃やいば警あやを雄おとこに巻まき左右さゆう
 め打うぐるゝ又また仰あがるぬに突つ倒たおせが絢あやるがらうらり果はたく將しょう棋ぎ倒たおしあ
 蹠たぶくと屏びん風ふうの上うへふ薄うすびくろの内うちにくせ短たな刀やいばに膳ぜんふとつらえ
 阿あ呀やと魂たま消しる声こゑととも流ながる鮮あざ血ち龍りゆう田でん川がわの貼や繪えのみみら
 色いろまうこの是こゝろいと驚おどろく燕つば浪なみまが假かり威いの打うち擲し毛げを吹ふくは火ひを
 求もとし周しゅう章しやうに碗わん久ひさも忍しのびうね走り出でてはび活いきつとまふくは驚おどろ

松山若くはげりる息を吐き死んと
 思ひ定て一夫の奴めつらぬれ家
 刀自のふた果ぬる人殺の金の買
 且このら是彼首ゆくおのが随ふ
 世とあつてくくくせめてもの罪滅
 にゆるるるが日来頼となる故郷子
 安の親世音母の像見の護身囊
 棺の宛めくぬれどむむをげいぬ
 安ゆりぬと碗久ハむとゆくと松山
 掛る護身囊を搔きつく松山



額ふと著戴するを燕波々ハ
 つくぐとんく不審や是ハれは
 女児常花と有馬の人小賣者
 且死久後守らせぬ人ぞと死ね
 さらけ紐と裏の裂ふむえあり
 女児小のあらざる。あらむのま
 やとて燈火近く引てて常ん
 顔も今さら小聯もせぬ守り
 老の臉ふとせらるね一涙あり
 松山ハ松山ハ悲しくて



女思常花と宣ひしまづ。その母は在せしが推して置かれた。
 ひらゝ家のめづるづら回しよ。いと回せぬ親の恥をわづら。
 本貫も定らぬゆゑに悔しき。伊勢國椋本の郷人服部
 浦父がひとり女兒小名に常花母の名に忘井と名をあらひしと波
 もあふが無婆まのいます。驚きさすりまを忘井の女児ゆて
 むらゝのこゝろいづゆと親子が。あつと別れの悪因縁持しよる
 まもちうらうら。松山のいづるわ苦痛の堪ふとえし。碗久頻
 に嘆息し死後まで愁のうらる哀まをこつらう。ま松山より
 つく縁故を説きしるべし。昔松山が常花と名を有馬の湯本の
 むらゝとまも父は従ふ彼所へ赴き湯治せしが。父戲まの

二首の古哥と字して常花のふへ嫁ふせんと契約しゆひし。つら
 その短冊にけしむらとまも。あつと常花と名を実直とて喜ま
 許しうら妬婦が怨美深く憎きて崇とる。程に主人藤松驚か
 怕まて常花と越路のうら賣うそり。まもあらふてつら父
 あまび有馬へ赴て彼女子を訪ひし。あまづの古ふよつてと
 めいあらし今に往方もままをいひ。ちうら及び立腹りのみ途
 中つらる故ゆや主君殿の兵士とめく忽地うら父を討し家も
 討ま走向とてまえし。若黨田井八太郎をいひものに諫められ
 て故御と立退きこの浪速の漂泊して乳母のりる野崎をいひ
 に隈會て假初めその家と姓をうらす。常花が松山と名告うて

とにぬる小逢へく八年来の苦節を安く小痛まうく又振引を
の客あるに至つていづれも思ひ屈へ他一人の伴にせど
伴まじと誓ひるがら金どりのねばいふまうむと養母とのを伴人
實今宵一畏の金と恵のひへ程ふそまを懐うとある道ゆて
盗賊の跟らまへを路ゆく人の助をえて幸とてとら小到つて聞きた
まへ金ゆのめらてその容しる鉄具より不審さる限つるれど
人を疑んも罪なうと思ひ松山を刺とらうとまも死んまつる
野へ家刀自のままらるてまをどめ刃を鞘小納る小違つくとの屏
風の骨の間にさへ入きておれたつがその短刀めて松山が命を預つて
正は是今月今日艱難にく路つるより前世の因果よりなるゆゆ

ものや一三軍期と五十一と物づくまへ燕波の波くい安く毎小胸を
ぐて声をはびてすれまをり落方決の際へ團平が奸計めく女兒
を賣らう二人の支黨さ入殺して逐電せしとめゆりその身も
伊勢の住ひの懶くて故郷を迷ひ出し死有馬に赴きそ常花を
訪んま思ひいづと愚るより謀らまて女兒を賣らる
ゆなくめんも面目をまは平がに耻とまよらざりしと
安えまらへスひめうさるようぶる死身ひもりに親族もるゆ津
小流ま渡つもの乞食して法名青春尼と名ま一が彼此人の情小
て遂山花街の牙波女とるりる不意使侍のりてと小妓院を聞
き後有馬に赴き女兒を訪ふとこまそその往方の志まび空く

駭の年月をこころしく思ひかうり。彼の子安の観音堂を造りうえ
 前の夫がわづらひ世の宿願を果しうば女児小逢しあつて思ひを
 悠の發願ゆくとおぼすが人の子にうりて銭を遣ひて親小追
 他家をうりて路頭ふ立ちゆもあや銭あるうらひ神子敬ひ
 銭尽れば餓鬼よりも諦避くこころいせ本積貯るその金の殖よ
 多く女児をまらば毎日いそぢお虚過といひのうらむらうま
 けうけく殺すを子ゆ多う迷のく罪をます浮世の親の見懲ふ
 みひひるる世仏の方便ゆめゆりなるよ。子まもからぬ志井が
 今こそくへ老散て乾蒸きもなばるるまじも昔ハ河竹の
 色を蕪ぎ媚と賣りてそむくその標客を詫さる悪報也後

の夫小謀らましく女児もなるが瀬ふこそ破らぬ隠れ身と喪へ
 面目もあらぬ無波くが懺悔ゆ造りて罪もゆるせぬ観世音南
 無阿弥陀仏と唱つ、鮮血あたる松山が短刀とあるよりそく胸さ
 ろく突くろまば襖を膚て客まの内ゆも咬ゆる苦痛の一声ハ何
 夏とて碗久がごと彼野ふ身ひとうさうたうねて走りゆる襖を裡より
 さと閑き刀引提て立出る松山が根引の客碗久とをんく小膝を屈め
 中とまろく投捨まば人の入は是別人まらち若黨田井八太郎とあり
 不審き碗久がゆりて怪しむ襖のこころハ坐行出るハ野橋より
 懐鈕咽喉ふつらぬまき朱ぬ染る形容は是彼驚痛しむり
 数々の袖の雨降る、漏る周章に野崎ハ細き声と励しや推子の

身大直と思ふのそとく。松山どのの懐胎と露なるもあつたをくらふ。
 日見子八太郎の天満はくめづりあり。その仔細のまづらふ家。
 伴いふるわらう。潘せおれと密めと直に談合し。のりめとて松
 山どのを引きたら古主の飯茶と進らせんと思ひし。の家を塗
 籠をも質平してそのびやふ金とそつ。八太郎と旅客にお
 けし。賊夥ゆつらむ。松山どのの入り。つて猛り身價の
 をいせ。今宵一晝の金ありと偽り。賣残つてる漆器のその
 鉄具と進らせ。の。故の松山どのの疎ましく奪が。の路
 を断舊の武士の立ち。の家を。真の入り。と計り。古の仇と
 する。今將思ひ。浅き。や只一言の戯と実と。其その人ゆゑに千

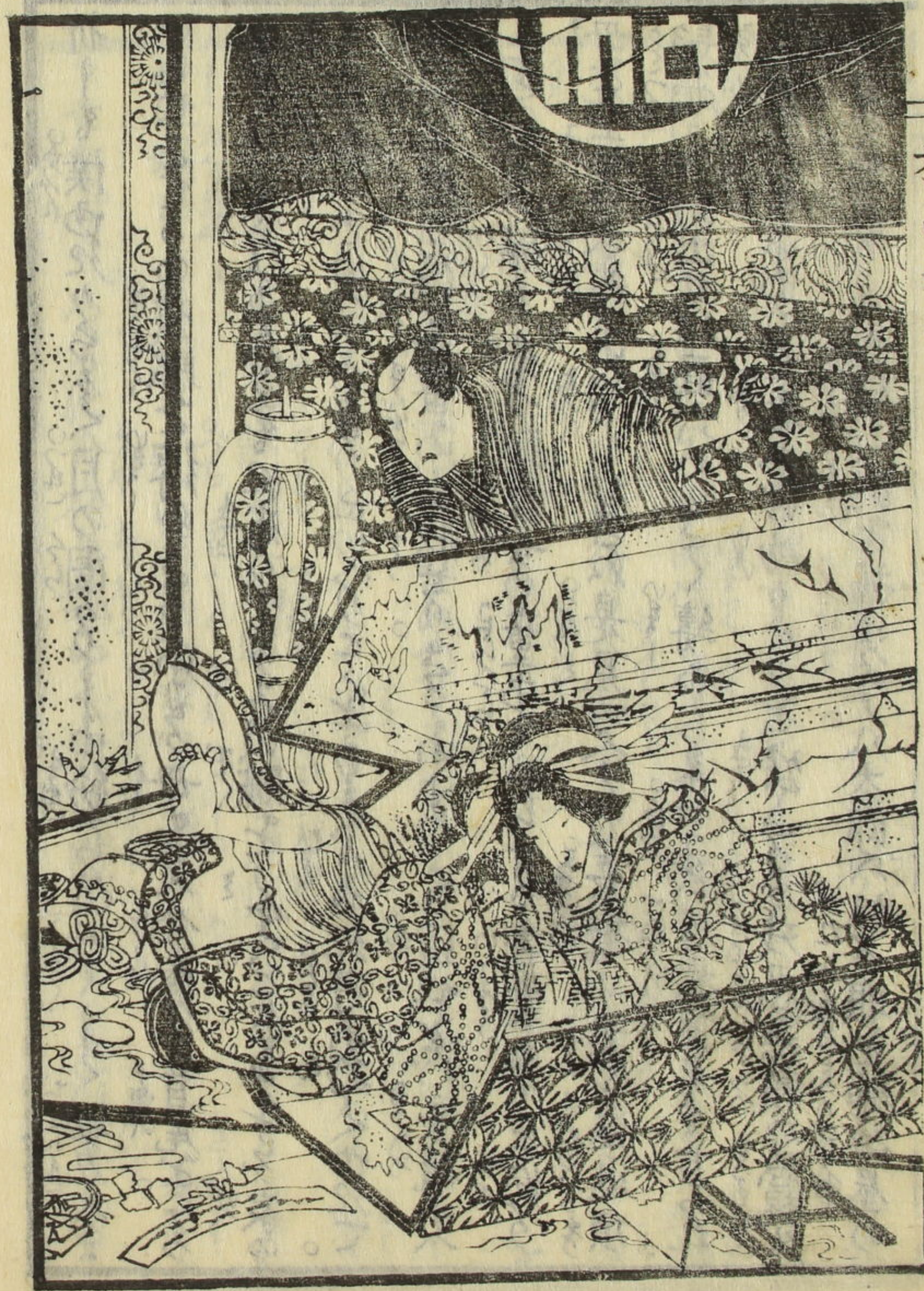
万無量の辛苦と稟をやく。ゆづり大坂の廓は稀ある。負女の鑑誠
 がゆづり有身を引きたる。せん。計較し。鬼く。む。お。さん。か。
 あ。い。く。ま。と。せ。ぬ。う。へ。神。仏。と。ま。り。め。甲。夜。ゆ。庭。小。立。縣。ま。
 更。く。襖。の。と。も。こ。あ。ま。一。五。十。と。使。は。り。眞。主。の。ま。ま。宗。達。と。る。
 夫。久。右。王。門。へ。面。を。ま。よ。と。ぞ。双。の。伏。は。る。の。見。子。か。の。不。便。
 を。加。え。の。ひ。ね。と。り。の。声。も。と。ま。る。り。八。太。郎。の。母。が。自。殺。の。數。行。の。決。
 を。押。う。ね。碗。久。が。る。と。り。道。く。額。つ。ま。ま。ま。ま。う。さ。う。恙。多。く。在。す。る。
 る。の。母。の。物。が。り。ゆ。く。安。堵。せ。り。抑。僕。白。米。の。城。中。に。討。合。の。兵。
 を。切。脱。君。小。追。着。を。ら。と。せ。り。が。その。行。方。を。ま。ま。う。む。多。ら。す。も。近。
 江。の。山。里。の。羊。を。追。く。つ。ら。く。ゆ。か。う。先。君。猛。り。討。合。の。ひ。縁。故。

定くるらずといひども鳥屋尾七郎二と疑くは彼がより由死
 を窺ひ事おぼろしきありともあらんりき酒内伊勢國に
 赴き対るがらそのころの為体を安く先君枉死のひひの妬婦
 が祟つて露なるも罪多かり分明なるにようく大言のうく後
 悔のつく鳥屋尾氏に命ぜらる君の行方を索さくのみとてとを
 のてこそ母頼ふ山おのをいせし思ひのふもして引まよし
 君を勢及ぬ故しものらせんぞ謀りしありうくて僕いる君よ
 索めひをらんぬ諸國を編歴し近曾浪速のまうくとせらるるも
 母に環會といひども別の旅宿を求めく潜び居るるへ只今母が
 やせいどくあるに今夜長堀ゆく君盜賊の跟らる難美ののみ

折しも僕ゆたりうき月の闇りし小紛らひ外くし助力をま
 せさせそりの盜賊を縛りしふら母も又今宵の首尾とて
 のぞく思ひのうきまにまのしこの賊とてとてとてとて家の
 主管直六といひのめりといひつとをゆへ入る死所おとゆたて
 責問の彼が隠匿審の白けせりさるふようく這奴を長櫃小入
 せとて小早し來り歌妓女の童小よとらなる衣裳多りとゆり
 母とが庭の木陰小潜しおまぬ是見の人として長櫃の蓋を返退頂
 髪廻り引出せば直六のいひて縛らる口ゆへ拭とせさせられ
 長櫃の裏のわけて妻子の物ごとをばつら残忍無頼の悪棍も
 面うくやめりなん経く路と握得余八太郎の怒る眼と睜碗屋の



松山
横死
の
さしな



家を買ふて主君とやいさるふい罵り刺今宵の拳動言語
 に終る癖者なり今こそ思ひあらせんとひねまきつ刀を抜く
 斬んとし蒸波のこまきとて苦いげある声と揚中へまが待
 のくとまてと松山が親父にうらま為ゆの後の夫より一團平とゆ
 きてるものなり悪人なまて面ありその人を殺さまじい黄泉
 の隙ふと命ハ助めりうと勸解るに松山もや眼をひらき
 のめりまねばるふとあへ命をす孝ひふ八太郎も撃ちぬ
 碗久きく歎息してまゐる身の恨より松山親子非命に
 死し母も思ひ野崎と自殺して矢ぬふ又松山ふ由縁ある團
 平の直六を殺しるバ人の罪のまを責と己が非とあらざるに似り

恨せとてとていさるふ蒸波のい飲ばりう苦痛も忘さる荒
 と笑と人と産身と亡するも金の多と悟ると死の石尾にも
 等しきと盗ま下とく梓弓案山子に似る老の身の撓る死腰
 小煙ひたる賤布も重き罪障と思ひ己が仇るり今の中く
 自にあらるんも忌りうとて腹小巻る勝博の賤布とまて投
 捨まば飛散る黄金ハ茶華花の井壇の玉水流るうと或は十
 枚二十枚ひらうとと毒く形容彷彿と金色の蛇とえ
 て彼此とるく跋繞るがふ世の人の恨と送せ禍媒の賤眼前
 輪回と示すむおそろしき碗久いとまてとてゆく無常を觀
 らん八太郎が刀とをろく肚と切らんとするを八太郎吐嗟とてそのま

携^たりてや^まやくふ引^ひ道^{みち}は野^の崎^{さき}の関^{せき}を眼^めを見^みひら死^し稚^こ子^こを殺^{ころ}
 す程^{ほど}もらば身^み自^じ殺^{ころ}しけりあ^あの老^お女^{んな}と松^{まつ}山^{やま}の殺^{ころ}
 せ^せら^らの婆^ばのよりひ^ひと^とく^く係^{けい}累^{らい}を^をせ^せす^すあ^あら^らせ^せと^とう^うが^が見^み
 ぬ^ぬり^りひ^ひ送^{おく}せ^せに^に大^{だい}死^しと^とせ^せぬ^ぬの^の声^{こゑ}も^もわ^わた^たり^りつ^つ松^{まつ}山^{やま}も^も又^{また}
 息^{いき}の^の下^{した}に^に今^{いま}死^しる^る身^みを^を存^{ぞん}命^{めい}と^と後^{のち}の^の世^よ吊^ぶて^ても^もら^らば^ば千^{せん}僧^{そう}の^の回^{わい}向^{こう}
 ぬ^ぬま^まま^まと^と嬉^{うれ}しく^くゆ^ゆら^らめ^めと^と自^じ害^{がい}と^と思^{おも}ひ^ひる^る末^ま期^きの^の一^{いつ}切^きも^も啣^{くは}み^みて^て
 写^まの^のま^まび^びと^と死^しぬ^ぬも^も死^しす^すと^とて^て哀^あ傷^き殊^じふ^ふり^りや^やま^まし^しり^り八^は太^た郎^{らう}も^も
 中^{ちゆう}方^{かう}の^の死^し悲^ひ歎^{たん}と^と思^{おも}ひ^ひて^て碗^{わん}久^く小^{せう}對^{たい}の^の園^{えん}宅^{たく}の^の男^{おとこ}女^{むすめ}熟^{じゆく}睡^{すい}して^{して}い^いま^ま
 ち^ちら^らぶ^ぶと^と幸^{さい}ふ^ふと^とよ^よ直^{ちやく}山^{さん}故^こ御^ごへ^へ飯^い茶^{ちや}の^のつ^つと^と忠^{ちゆう}孝^{かう}而^にも^もら^ら
 全^{ぜん}し^しぬ^ぬらん^{らん}夏^げ願^{がん}い^いく^くい^いと^と諫^{かん}ま^まが^が碗^{わん}久^くハ^ハ匹^{ひつ}と^とう^うち^ち掉^{てう}父^ふの^の罪^{つみ}を^を

より^{より}望^{のぞ}え^えく^くらん^{らん}本^{ほん}意^いを^をま^まど^ど何^{なに}の^の面^{めん}目^めあ^あつ^つと^と阿^あ容^{よう}と^とと^と取^とり^り仕^しら^ら
 へ^へき^きも^も捨^すて^てる^る身^みを^をま^まび^びそ^そ無^む何^{なに}有^{いう}の^の御^ご又^{また}抜^ぬぐ^ぐと^とい^いひ^ひ
 も^もと^とら^らず^ずか^かが^がて^て刀^{たう}と^とま^まる^るや^や髻^{むす}帯^{たい}と^と剪^き剪^きす^すれ^れば^ば八^は太^た郎^{らう}ハ^ハ
 諫^{かん}う^うね^ねと^とや^やく^くふ^ふ立^たち^ちあ^あが^がり^り松^{まつ}山^{やま}の^の母^{はは}子^こが^が母^{はは}の^の菩^ぼ提^{だい}の^の為^{ため}に^に
 放^{はう}生^{せい}會^{かい}悪^{あく}ひ^ひる^るぐ^ぐへ^へ造^{ぞう}り^り罪^{つみ}を^を滅^{めつ}せ^せと^とい^いひ^ひ論^{ろん}し^しつ^つ直^{ちやく}六^{ろく}
 が^が縛^{ばく}の^の索^{さく}切^きと^とら^らひ^ひ縁^{えん}より^{より}下^{した}へ^へ衝^つ落^{らく}せ^せば^ば立^たち^ちわ^わも^もき^き逃^に去^そぬ^ぬ
 助^{すけ}け^けら^らま^まて^てる^るそ^その^の入^いり^り無^む波^はと^と喜^{よろこ}び^びの^の塔^{たつ}の^の拜^{らい}ひ^ひも^も世^よの^の美^み
 理^りら^らら^らま^まる^る薜^び蘿^らの^のの^の葉^はも^も枯^かま^まて^てて^て立^たち^ち松^{まつ}山^{やま}が^が浅^{せん}黄^{かう}縮^{しゆく}
 縮^{しゆく}茶^{ちや}縮^{しゆく}猶^{なほ}寐^{まい}衣^いと^と死^し出^{しゅ}の^の旅^{りょ}衣^い最^{さい}期^きハ^ハあ^あら^らじ^じ嫁^{よめ}姑^こ短^{たん}き^き夢^むの^の世^よ
 の^の中^{ちゆう}に^に明^{めい}行^{かう}春^{しん}の^の曙^{しゆく}ハ^ハ三^{さん}人^{にん}ひ^ひる^るき^き草^{くさ}ま^まら^ら花^{はな}の^の街^{まち}も^も嵐^{あらし}あ^あつ^つ

日ハゆりたる西の空教をくく之や阿弥陀仏と唱て飯を碗久を
後にも唄ふ物狂ひ遊君狂ひの教誡を聞人耳と側るる人

作者曰

この一編ハ就中傀儡演戯の曲節に擬して婦幼の為小驩んす
只識者の嗤笑を羞はず得意の作文ゆりす其に已よを得られん

柳巷話説卷之四終

つらうとせ

以備

本傳ハ八日教十日を二限りとあはれ

まことハ一切の政事ナシ

法子を遊ばすの式ハたむこと

うらなふに大なる

いづくの換換料ナシ

一冊も終然終るる

みる教りし

安

安

井

